

友の会通信 2009

No.3 (通巻52号) 2009.1.1発行

■ 目次	新年の御挨拶／設立10周年記念新春企画の御案内 … 1	会員の研究ノート／サークルだより …… 2
	会員の研究ノート『資料紹介』 …… 3	会員随想「秋の研修旅行 参加記」 …… 4
	報告「幻」の「大日本地名辞書」の初版本公開 …… 5	秋の行事報告／友の会伝言板／編集後記 …… 6

発行：吉田東伍記念博物館友の会 〒959-2221 阿賀野市保田1725-1 (阿賀野市立吉田東伍記念博物館内)
TEL0250-68-1200 FAX0250-68-5016 web版友の会通信<http://diary.jp.aol.com/nuuhju/>

私のひとりごと ～『世阿弥十六部集』発刊100周年の年頭にあたり～

友の会会長 長谷川 明一 (はせがわ めいいち)

友の会会員の皆様、新年おめでとうございます。

昨年は様々な出来事で世情穏やかならざる不安な日々の連続でした。今年は私の干支でもあり、丑年にあやかって忍耐強く、優しさと思いやりの気持ちで一年を過ごせたらと思っています。暗い世相も何のその、気概をもって事にあたりたい、それが年男の本音でもあります。

さて、友の会も10年目の通過点にさしかかり、次なる活動の目標として、これまでの恒例行事に加えて、趣味同好会のサークル活動の充実を図っていきたいと考えています。既設のサークルである「白河荘を歩く会」は参加者も多く、年々充実した活動を行っています。そして、もう一つ「世阿弥「花」の会」があります。こちらは参加者が少なく活動の輪

の広がりが小さい状態です。そこで、図らずも今年、平成22年(2009)は吉田東伍博士が明治42年(1909)に吉田本と称される『世阿弥十六部集』を発刊してから、丁度100年目の記念すべき年にあたります。「世阿弥「花」の会」のサークル活動は、この機を千載一遇のチャンスとして、同好の士を募り、世阿弥へのアプローチの方法を考え、東伍生家での謡曲や仕舞、能面の観賞会などの行事を実施できたと思っています。

サークル活動による実体験から、『世阿弥十六部集』の世界を身近に感じてもらい、お互い参加したくなる楽しいものにすべく、多くの皆さんのお手を煩わしたい。『世阿弥十六部集』発刊100周年の年頭にあたり、こんなことを夢見ています。

設立10周年記念新春企画

第11回 吉田東伍記念博物館友の会 研究発表会

友の会会員が日頃の研究成果を発表する恒例の研究発表会。第11回目のテーマは、2009年のNHK大河ドラマ「天地人」の主人公・直江兼続です。義と愛の武将といわれる直江兼続ですが、史料から探るとどのような実像が浮かび上がってくるのでしょうか。直江兼続とその時代を、阿賀野市域との関わりも含めて考えます。ふるってご参加ください。

■日 時／1月17日(土) 13:30～15:30

■場 所／市立吉田東伍記念博物館 2階研修室

■入場料／友の会会員は無料。

会員以外は博物館入館料(一般300円)が必要です。

■定 員／50人(先着順)

■申し込み／

資料準備の都合上、1月15日(木)までに友の会事務局(博物館内)へ電話(0250-68-1200)かFAX(0250-68-5016)またはEメール(y.togo@oregano.ocn.ne.jp)でお申し込みください(FAX、Eメールで申し込みの場合は氏名、住所、電話番号を明記してください)。

■発表テーマ／史料から探る直江兼続と妻おせん

■発 表 者／田中 洋史 (たなか ひろし) さん

(吉田東伍記念博物館友の会事務局)

■発表者プロフィール／

昭和47年、長岡市出身。新潟大学教育学部、同大学院修了後、水原高校の常勤講師となり、阿賀野市(水原町)で社会人生活をスタートする。その後、安田高校・黒埼高校・加茂暁星高校の非常勤講師、安田中学校心の教室相談員。現在、長岡市立中央図書館文書資料室嘱託員。平成20年7月の新潟県立歴史博物館「天地人」リレー講演会(南魚沼市会場)で講師をつとめた。

なんと読むの？この文字群

会員 波多野 盈（はたの みつる）

館内に展示されている『星のかずかずかきつけぬ』メモ帳は、明治初期の小学校上級用理科教科書『博物新編二集天文略論』（合信—1855年著）の各項目の冒頭部分を書き出したものです。『博物新編』は中国で発行しましたから漢文で書かれています。理科全般を、西洋科学をもとに三巻作りました。天文学は二巻目で、もちろん地動説で記述されています（合信は英国人）。

9年後、日本でも1864（元治元）年から翻刻されました。それは原書に訓読をつけたものでした。

明治政府は明治5年、小学校上級用の理科教科書に採用しました。欧米語を音訳（漢字表記）した箇所もあるので、日本人には限りなく難解でした。なにしろ耳に入った「音」を、中国発音で表記した漢字群ですから解説が大変です。

「かな」という優れた表音文字があるのに、残念ながら中国から輸入した漢文理科教科書が優れていました。今もさまざまな分野で当時の輸入難解用語群が生きています。現在、テレビの漢字クイズ番組に登場しているものもあります。

では問題を出します。つぎの漢字用語（『星のかずかず……』や他に出てくる音訳漢字表記）は、なんと読むのか挑戦してみてください。

問題（答えは6ページに）

- | | |
|--------------|-------------|
| ① 合新（人名） | ⑥ 亜徳那（地名） |
| ② 侯失勒（人名） | ⑦ 拂郎察（国名） |
| ③ 刻白璽泥鳩思（人名） | ⑧ 止百里亜（地方） |
| ④ 宗賀天礼須（人名） | ⑨ 哈曆逸（人名） |
| ⑤ 可命比斯（人名） | ⑩ 波羅多伽兒（国名） |

サークルだより

白河荘を歩く会

10月例会報告

白川御館の候補地を歩く③ ～六野瀬館跡(阿賀野市六野瀬)～

10月2日、8人の参加者により、10月例会を開催しました。いつも荒天となる六野瀬館跡でしたが、三度目（三年目）の正直で秋晴れのなか見学することができました。六野瀬館跡は、県内でも最大規模（約200×100m）の単郭の中世居館跡です。昭和39年の安田町教育委員会（当時）による調査概要を参考に歩きました。土塁付近では珠洲焼きのすり鉢？を表面採集！現地を歩く醍醐味を味わうとともに、館の歴史を考えるうえでの貴重な資料の発見に一同大感激の巡見となりました。

その後、発掘中の三辺稲荷遺跡（阿賀野市百津）を古澤妥史さん（市教育委員会）の説明で特別に見学させていただきました。弥生から古代まで、「キャンプ的な性格」を持つ遺跡を、往古の百津渚の風景も想像しながら歩きました。発掘作業員の皆さんの丁寧で慎重な仕事ぶりにも感銘を受けました。

やはり現地を歩くことは楽しく、晴天がその思いに拍車をかけてくれました。



六野瀬館跡の発掘調査の概要を見ながら巡見

3月例会のご案内

日時：3月5日（木） 13:30～15:30

会場：市立吉田東伍記念博物館

1階ワークスペース

内容：学習会

- ① 平成20年度の活動報告、平成21年度の活動計画
- ② 文献紹介：高野山清浄心院の供養帳にみえる白河荘の人びと
- ③ その他、持ち寄りの話題提供をお待ちしています。

※非会員の方は入館料が必要です。※資料準備の都合上、参加ご希望の方は3月3日（火）までに友の会事務局（TEL0250-68-1200）へお申し込みください。

【資料紹介】 水原代官の書 (佐藤信次氏 蔵)

会員 唐橋 久美子 (からはしくみこ)

水原代官所の第十二代代官を務めた男谷彦四郎^{おだにひこしろう}の書が見つかった。

阿賀野市下条町の佐藤信次氏が先ごろ入手されたもので、同氏と親交のある吉田東伍記念博物館の渡辺館長に取次ぎを願い、実見させていただいた。

書は七言二行の対聯。軸装一幅。本紙寸が縦132.5糎×横40糎。総丈は縦203糎×横53糎。筆期や伝来については不明であるが、たいへん優美で風格ある筆致である。

「雲封蘿屋常疑雨」

(雲 つたの屋を封じて常に雨を疑うという)

「泉咽松巖半是風」

(泉 松巖にむせび半ばこれ風になる)

燕 齋 孝

と釈読してみたが如何であろうか。

男谷彦四郎は名を思孝^{ひろたか}、字は君則、号は燕齋^{えんさい}、本名男谷彦四郎忠果という。安永6年(1777)生まれ、天保11年(1840)に歿した儒者で、旗本男谷平藏忠熙^{ただひろ}の長男、つまり米山検校(越後長島(現・柏崎市)生まれ、初姓は山上、名は銀一。旗本男谷氏の株を買い男谷検校と称した)の孫である。

寛政12年(1800)に幕府の表祐筆となり、將軍の御内書、判物、朱印状、老中奉書、触書、日記、名簿などの書写のほか『寛政重修諸家譜』^{おもてゆうひつ}という諸大名以下幕臣御目見以上の諸氏の系図・略歴を記した書(文化9年(1812)に完成)の編さんや『藩翰譜』の続編となる『藩翰続譜』(『続藩翰譜』または『藩翰譜続編』とも言う)の編修、あるいは朝鮮との往来文書の写字などにあたった。

文化10年(1813)、信濃中之条(現・長野県埴科郡坂城町中之条)代官に任じられ、文政4年(1821)、越後水原(現・新潟県阿賀野市)代官所の第十二代の代官に転任、文政6年(1823)まで在任した。

彦四郎の弟(男谷平藏忠熙の三男)は勝家に養子に入って勝小吉を名乗った左衛門太郎惟寅^{これとら}で、すなわち勝海舟は彦四郎の甥になる。また、彦四郎自身すぐれた剣客だったと言われているが、彦四郎の養子男谷精一郎(信友)は「天保の三剣豪」の一人で、幕臣にして直心影流の達人。講武所奉行並の要職にも就き、後世「剣聖」と謳われている。

11月3日、阿賀野市市民茶会の茶席を持つにあたり同軸をお借りし、水原代官所の御学問所に掛けさせていただいた。第十二代水原代官男谷燕齋彦四郎の書は温故堂と呼ばれるこの部屋の大きな床の間にも堂々たるもの。折りしも午後には雨となり、何か床しく、心に沁み入るものがあつた。



会津坂下を歩く

会員 信 田 久 榮 (のぶた ひさえい)

白河荘一帯は、平安末期、12世紀末まで越後城氏の本拠地であることから、秋の研修旅行は、その城氏のゆかりを訪ねて会津坂下の町を歩くことになった。しかしながら11月20日は初雪なのになかなりの積雪を見るほどの雪の中を出かけることになった。

生憎な激しい降雪のためフィールドワークもままならず、陣が峯城跡に立つ公民館で、地元講師を務める吉田博行氏のご配慮でスライドを利用しての室内勉強になった。熱心な吉田氏の講義で古き会津の歴史に接したことは大変素晴らしい学習の機会となる。

阿賀川に流れ込み、それが我が故郷につながる阿賀野川に通じて文化の交流は、新潟から海を介して、西日本はもとより海外にも拡がり、阿賀野川が果たした役割は素晴らしいものがある。特に日本の古代史に残る、西日本重点の“前方後円墳”がこの会津の地にも巨大なそれが築造されていた歴史を知り、恐らくはあれほどの文化を残した人々も、阿賀野川を利用してこの地へ進出したと考えられる。

時代が下って日本に仏教が伝来して以来、その布教の方法で最澄と議論を闘わした徳一が会津の地に建てた仏像の一つと言われる、上宇内薬師を親しく拝観できたことも収穫の一つであった。

初雪の研修旅行

会員 小野里 澄 子 (おのざと すみこ)

思いがけぬ初雪に見舞われ、これもまた一興かと思っただものの、直前のキャンセルも入り、少し不安な出発でもありました。

降り続く雪の山峡をぬって、福島県会津坂下町までは一時間。訪ねた川西公民館すでに「陣が峯城」跡地の中で、木立におおわれた空堀に小路が沿い、バスを降りた第一歩から研修の始まりでした。

現地講師は会津坂下町教育委員会の吉田博行氏。スライドを使って古代から中世の、豊かであった会津坂下町の歩み、陣が峯城の変遷、水運の要衝の地であったこと、またその重要性。そして、城氏を中心とした越後との深い関わりなどを懇切にユーモアたっぷりに語っていただきました。時間の都合から吉田氏も心ならず、飛び飛びのお話をされたご様子でしたが、歴史は全く素人の私、その有意義なお話をここに的確に表現する力がなくて残念ですが、再度拝聴する機会が欲しいものですね。

昼食は吉田氏のお勧めという蕎麦処で新そばを堪能。しっかりした木組の広い部屋、高い天井、大きな囲炉裏にストーブ、薪がよく燃えて、それもお馳走の一つでした。

楽しみにしていた古墳(鎮守森・亀ヶ森)は雪のため、バスの中から遠望したのみ、宿題をやり残した感がありました。それにしても会津坂下町に残っているたくさんの古墳群に比して、越後は少ないのはなぜ、と疑問がわきました。歩けたらよかったのに、と心を残し、雪の中を上宇内薬師堂へ。

上宇内薬師堂は、国の重要文化財である薬師如来坐像を安置。無住のため集落の人たちの管理下にあり、拝観には一週間前に連絡が必要であることなどを含め、管理者の齋藤宣詔氏から説明を受けました。

像は西暦950年ころ造られ、その後たび重なる洪水や地震などにより、長く捨て置かれた由。元禄4年、堂を現在地に再建。同9年、薬師像、諸仏の修理を完了し、現在に至っているという。人間よりはるかに永く生きる仏像の運命の変転は、その時代時代を生きた人々の心の有り様をそのまま写しているものなのであろうと、感慨深いものがありました。像はケヤキの一本造り、素朴さの残る大らかで力強く、そしてふくよか。とても魅力的でした。それにしても当日の寒さには閉口しました。あまりの寒さにお話の中身の半分はうやむや。体の芯まで冷え切りました。

再び吉田氏のご案内で文化財整理室の展示物を見学後、会津坂下町を後に。帰路の県境は真冬並の雪降り。雪に滲む山野の美しさに感嘆しながらも、事故車、タイヤ交換車、ノロノロ運転等々、雪国の長い生活の始まりを実感しました。そして、一昔前までの人々の難渋も思い起こされたのでした。

ほぼ予定通りに帰着。本当にホット致しました。皆様お疲れさまでした。



参加者20人による記念撮影(於上宇内薬師堂)

“幻”の『大日本地名辞書』初版本

吉田東伍記念博物館館長 渡辺史生（わたなべ ふみお）

“幻”と思われていた『大日本地名辞書』の初版本が見つかり、当館に貸与された。これは『大日本地名辞書』完成100周年となる2007年1月、当館関係者が関東地方の某氏より入手、調査研究のため提供を受けたものである。

『大日本地名辞書』の初版本は分冊頒布（全11分冊）のスタイルで、東京神田の富山房から刊行され、最初の「第一冊之上」が1900年（明治33年）3月、完結編となる「汎論・索引」は1907年（明治40年）10月の発行と、シリーズの完結に7年半もかかった。刊行期間が延引したことに加え、肝心の造本もハードカバーでなく薄表紙、小口未裁断の仮綴製本であったこと等が禍して、今日では端本の状態でも残存例はごく少なく、刊行当時のままの原装全11冊完揃本の存在は長い間絶望視されていた。

念のため当館で全国の公共図書館、大学、博物館等の所蔵状況を調査したところ、初版本全冊を保有している施設は東京国立博物館など3館確認できたが、いずれも改装や合冊などの補修が加えられており、原装で全11冊を保有している施設は皆無であった。このことから刊行当時の状態を留める初版本が全冊完揃いで発見されたことは奇跡的であると判断されたので、同資料を一括、08年12月1日から12日まで特別臨時公開し観覧に供した。



▲『大日本地名辞書』初版本（1900～1907刊 全11冊完揃）

青年期の吉田東伍は、明治政府が行なっている行政区の改編が、地域に固有の伝統や文化までも消散させ、詰まるところ何処に行っても同じ顔をした金太郎飴的な地域づくりに向かっているのではないかと疑心を抱いていた。斯様な地域再編で「地名」が失われることへの危機感と焦燥とをつのらせ、遂に31歳にして本書の編さんを決意する。

地名と言うのはその土地に「固有」な文化・歴史（人々の営み）を示すそのエリアについた呼び名である。地名は単なる符号や識別記号ではない。識別するだけなら郵便番号のようなコードを並べるだけで十分だろう。東伍は土地の“個性”、歴史の発展形態の“個性”に注目して、この辞書を刻苦独力、足かけ13年費やして完成させた。

地名の項目立てを、明治に入って改定された行政区分に逆らって、わざわざ、上方、四国、中国、西国、北国、東国、坂東、奥羽など古くからの伝統的な国郡分けにし、和名抄以来の郷名を採り入れたりしているのはこうした理由からの注意喚起である。

吉田東伍は郷土の大地は日本の風土の一部であると見ている。すなわち日本を正しく理解するためには、これを組み立てている郷土を精確に、しっかりと見る必要があり、そのためには情報の集積化、共有化が緊要であると考えた。

わが国全土の郷土の集大成＝大日本地名辞書の誕生は社会的にも波紋を広げたが、何と言ってもこの辞書のデータが基になって、各地の郷土研究のとば口が開かれたことは長く記憶されるべきであろう。それまで一部の専門家や、好事家が秘匿してきた史的情報を東伍は誰もが利用できるデータベースとして構築し、そればかりでなく、その情報の援用、引用の仕方の範をも例示したのである。

その点を真っ先に評価したのは東伍の親友、喜田貞吉（きたさだきち：1871－1939）であった。喜田は地名辞書第一冊之上が配布された直後、学会誌『歴史地理』（第二巻第二号 1900年5月発行）に「大日本地名辞書を読む」という文を寄せ、その中で以下のように激賞している。

「本書記述の体裁に於て多とすべき所は、其解説を下すに、多くは其事実を精確なる書籍より取り、且つその出所を掲げ、猥（みだ）りに架空の、断定を下す事を成さず、他人の説を採用せる場合の如きも、必ず特に某氏説と記して、其功を没せざらん事に注意せる等にあり。蓋（けだ）し、当今剽窃（ひょうせつ）流行の世にありて、著者の雅懷（がかい）欽慕（きんぼ）すべく、且や、かく説の出所を明にしたる事の、学者が之によりて更に研究せんとする場合に於て、利益少からずを信ずるなり」

これまた世紀を超えた銘ずべき警醒の評である。いま特に研究者を自認する諸氏には翫味を乞いたい。



東伍の生家で開催する恒例行事が定着！

とんとむかしを聞く会&サロンコンサート

オペラデュオ Felice (フェリーチェ) による
サロンコンサート Vol.6

テノールのSOSHIさん、ピアノのKEIKOさんの
アンサンブルで、イタリアと日本の名歌曲が
演奏されました。



とんとむかしを聞く会

友の会10周年目の今年、毎年開催してきた行事が定着し、過去最高の参加者を記録しました。8月29日(金)の「とんとむかしを聞く会」、9月15日(月祝)の「サロンコンサートVol.6」。博物館の建物に隣接する吉田東伍の生家を会場に、とんとむかしを聞く会は約60人、サロンコンサートは約100人の参加者がありました。行事が定着していくキーワードは会場と演者の一体感。話者の声色や甘美なテノールの歌声。夕涼みをかねたナイトミュージアムの雰囲気やツクツクボウシの鳴き声。二つの催しが日本家屋で醸し出した魅力です。それが東伍の生家の新たな魅力を引き出したとしたら、「継続は力なり」、会員のみなさんと共に歩む友の会のささやかな成果といえるかもしれません。



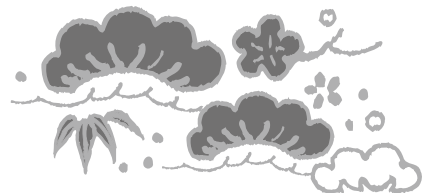
友の会伝言板

① 清掃奉仕活動にご参加ありがとうございました

9月7日、10月12日に安田商工会女性部の皆さんが中心となって博物館東伍生家周縁の清掃美化活動が行なわれました。友の会会長の陣頭指揮のもと草取り、小木の枝払いを実施。9月15日のサロンコンサートに来場される皆さんが気持ちよく利用できるようと汗を流しました。

② 「ウェブ版友の会通信」のアドレスが変更になります

1月いっぱいに変更になります。
詳細は「ウェブ版友の会通信」内、友の会通信等でお知らせします。



③ (予告)阿賀野市収蔵絵画展『小島清雄の20世紀』を開催します

会期：2月上旬～3月上旬(詳細日程調整中)
会場：市立吉田東伍記念博物館 2 階研修室

④ 原稿を募集しています

友の会通信の「会員の研究ノート」「会員随想」「友の会伝言板」のコーナーへの投稿をお待ちしています。
詳しくは友の会事務局までお問い合わせください。

P2の答え

- | | |
|---------|--------|
| ①ホブソン | ⑥アテネ |
| ②ハーシェル※ | ⑦フランス |
| ③コペルニクス | ⑧シベリア |
| ④ソクラテス | ⑨ガリレイ |
| ⑤コロンブス | ⑩ポルトガル |

※②は「ウィリアム・ハーシェル」を指す。

編・集・後・記

友の会10周年目の2008年、様々な行事の定着を感じる1年になりました。10年間のまとめをしつつ、新たな一歩を模索中です。新潟県内の博物館友の会のみなさんと楽しく交流できたらとか、「天地人」の時代の阿賀野市のすがたを探ることができたらとか、夢は膨らみます。初夢が正夢になるように、博物館と協働して努力精進の友の会事務局です。今年もよろしくお願い申し上げます。(H・T)